



月刊

インド

Monthly Journal of the Japan-India Association

財団法人 日印協会 (日印間の政治・経済・文化交流に貢献して 105 年)



第 12 回日本インド学生会議歓迎会での交流風景(記事参照)

目次

1. 決算理事会開催	p. 3
2. 日本インド学生会議報告	p. 4
3. 鹿子木理事の西北インド紀行 (2)	p. 5
4. <様々なインド> 第 18 回『インドとわたし』菊池龍三常務理事	p. 10
5. インドニュース	p. 14
6. イベント情報	p. 15
7. 新刊書紹介	p. 17
8. 日印貿易概況	p. 18
9. 掲示板	p. 19

1. 平成 19 年度決算理事会が開催

去る6月19日(木)、2007年度の(財)日印協会の事業活動と財務・経理内容の最終報告書を審議する決算理事会が、憲政記念会館で開催されました。森会長、平林理事長、理事各位の出席の下、真摯な討議の結果、下記議案が承認されました。議決事項は次のとおりです。

第1号議案 平成19年度事業報告

昨年度実施した協会の活動を記載したものが事業報告書です。昨年度は日印交流年でもあり、多くの交流行事が実施され、協会も例年以上に多くの行事を主催・後援しました。杉並区との共催の日印交流記念フェア、堂道・榎新旧駐印大使の歓送迎会や榎前大使による帰朝報告会、「ナマステ・インドア2007」における恒例の連続講演やセミナーの開催などです。また『インド季報』の発行や協会の機関紙である『月刊インド』の発行を通じて日印交流の深化に努めました。この事業報告書は当協会事務所で常時閲覧いただけます。

第2号議案 平成19年度事業決算報告

協会の正味財産増減計算書や収支計算書などの一連の経理・財務報告です。2007年度事業決算報告を平林理事長から提示され、笹田事務局長から内容の説明があり、審議した後、満場一致で2007年度事業決算報告が承認されました。この決算報告書も当協会事務所内で常時閲覧いただけます。

第3号議案 理事改選について

笹田勝義理事の退任、菊池龍三常務理事・事務局長の就任につき平林理事長から提案し、承認されました。

第4号議案 その他

平林理事長より、「今年12月に新公益法人法が施行されるのを機に、日印協会も同法上の法人格をできるだけ早い時期に取得したい。については検討と準備のためのタスクフォースを立ち上げたい。」との提案があり、承認されました。また、半田晴久理事より「長年日印交流に尽力している日印協会の更なる発展と活動を強化するために財政面で支援していきたい。」とのご提案があり、理事一同から歓迎と謝意が表されました。

2. 日本インド学生会議 (JISC) 報告

5月29日から6月11日まで、インドから13人(学生12人、オブザーバー1人)が来日し、第12期日本インド学生会議を開催されました。会議概要について第12期日本インド学生会議財務局長古谷耕祐さんより報告がありましたので掲載します。JISCの活動についてはホームページ <http://www.jspsn-india.com> を是非ご覧ください。

【会議概要】

スケジュールは右の表の通りです。

日 ち	場 所	内 容
5月29日(木)	東京	到着
30日(金)		開会式、文化交流会(①)
31日(土)		分科会(②)
6月1日(日)		分科会(②)、Infosys 講演会(③)
2日(月)		ホームステイ(④)
3日(火)		Wipro 訪問(③)、みなと未来観光
4日(水)		国会議事堂見学、銀座観光
5日(木)		浅草見学
6日(金)	京都	移動、京都開会式
7日(土)		京都歴史研究、金閣寺見学(⑤)
8日(日)		分科会(②)
9日(月)		清水寺見学(⑤)、閉会式、送別会
10日(火)		コルカタメンバー帰国
11日(水)		デリーメンバー帰国

① 文化交流会

お互いの文化を紹介し、相互理解を深めることを目的として、双方の学生が催し物を行いました。日本人学生は、剣道演武、和太鼓(外部委託)、ヨーヨーを実演しました。インド人学生からは、伝統舞踊、伝統音楽、現代音楽に合わせたダンス、詩人タゴールの紹介などが行われました。

② 分科会

本会議のメインイベントです。東京で2日、京都で1日行われました。

形式は、いくつかのテーブルに分かれてディスカッションを行うものです。

テーマは、「核問題」、「エイズ問題」、「国境問題」など全世界的な話題から、「日印経済」、「日本の政治システム」などお互いの国の現状の紹介まで、「英語教育」、「ボリウッド映画」、「結婚」など文化的な差異についての話題など、多岐にわたりました。

私が参加した「インド経済」、「核問題」について簡単に説明します。

「インド経済」では、インド人学生からプレゼンテーションをした後、日本人学生からの質問を受け、討議をするというものでした。プレゼンテーションの内容は、インドの政治・経済システムを簡潔に説明した後、インド経済の強みを紹介し、今後の展望を予測しました。日本人学生からは、「英語」や「IT」等のインド経済の強みを羨む声がある一方で、「格差」の存在や「インフラ」が未発達なことなどの問題点に対する取り組みが不十分という声もありました。

「核問題」では、私から「原子力発電」と「核兵器」のメリット・デメリットを説明した後、「原子力発電を増やすべきか否か」、「核拡散を防止すべきか否か」ということを議論しました。討議では、インド人学生から「核保有は『責任ある国家』になら許される。『責任ある国家』とは、世論によって核の先制攻撃が封じられているような国家だ」という発言があるなど、斬新な意見が出てきて、様々なことを考えさせられました。

③ Infosys 講演会、Wipro 会社訪問

日本で活躍するインド系 IT 企業の Infosys と Wipro の社員の人から話を伺いました。インド経済が躍進する理由や、インド企業が日本の商習慣で苦労している点などを教えていただきました。インド躍進の理由については、年 9.6%の経済成長を支えるのは、若年層の増加、質の高い教育であるとのこと。若年層の増加については、日本とインドの人口ピラミッドを比較した上で、今後更に労働人口が増えることを示しました。質の高い教育については、英語力もさることながら、IT 関係の教育が充実しているとのことでした。

④ ホームステイ

「ヒッポファミリークラブ」という団体にホストファミリーを紹介していただきました。ホストファミリーの方に、近くの神社に連れて行ってもらったり、日本食をご馳走になったりしたことで、インド人学生はホストファミリーとの間に暖かい絆を築きました。

⑤ 京都観光

京都において多数の寺を廻りました。上に記載した金閣寺と清水寺はその代表例です。インドにあるヒンドゥー教やイスラム教の影響を受けた寺とは、大分作り方が違うとのことでした。廻った寺は、どこも落ち着きがあり、「静」を大切にしている日本文化を理解する一助となったと思います。



〈写真：学生のインド系 IT 企業の訪問風景〉

【参加学生の感想】

『今回の本会議は、日本開催ということで、メンバー一同緊張と期待の中準備を進めてきました。結果的に、約 2 週間の共同生活や、様々なプログラムを通して、インド人学生達の日本に対する理解は深められたのではないかと感じております。最後に、今回の日本インド学生会議について応援いただいた日印協会をはじめとする組織の皆様、個人の皆様方へ感謝の気持ちを表して、筆を置かせていただきます。』（実行委員長 慶應義塾大学）

『この会議を通して私達は、沢山の友情を育み、沢山の知識を得ることができました。この会議の目的は、日本とインドの地理的・心理的な距離を埋めることだと思っています。日本は素晴らしい国であり、日本人は非常に温かかったです。私は、今後どんなことがあろうとも、日本で経験したこと、日本で得た友達を大切にしたいです。日本とインドの未来のリーダーとして、我々はこの会議で育んだ関係を継続させていかなければいけません。この関係が、より良い円満な未来の基礎となるよう願っています。』（デリー大学 Pushparaj. V. Deshpande）

最後になりましたが、『月刊インド』3月号において、「日本インド学生会議への個人協賛金のお願い」という書類を織り込ませていただきました。それを受け、4名の方から4万円のご協賛をいただきました。この場を借りて、厚く御礼を申し上げます。日印協会には JISC 発起人のお一人である長浜浩子先生、常務理事の原様に会議の運営に対してご指導・ご援助をいただきましたこと、厚く御礼を申し上げます。

〈第 12 期日本インド学生会議 財務局長 古谷耕祐〉

〈表紙写真〉

5 月末から 2 週間行われた「第 12 回日本インド学生会議」、開会式に引続き行われた文化交流会での 1 コマです。写真中央で太鼓を叩くインドの学生さんは Yuki Azaad さん。実は Yuki さんの父親は 20 数年前、インド貿易振興局長として東京に勤務されたアザート氏で、誕生した 1984 年 1 月 20 日に奇しくも東京に雪が降ったことを記念して Yuki (雪) という名前をつけられたそうです。

3. 鹿子木理事の西北インド紀行(2)

5. いざ、チャンバへ： アムリトサルからパタンコット経由チャンバへの旅

3 月 11 日、アムリトサルのバス・ターミナル 8 時 40 分発のバスで 3 時間、パタンコットに到着しました。同地で車を雇い英領インド時代からの避暑地ダルハウジー経由でチャンバのアロマ・パレスホテルに着いたのは夕日が山の端に落ちた 5 時半過ぎでした。

アムリトサルからパタンコットまでのバスの旅はバス・ターミナルがある大きな町々で大勢の客が乗り降りし、途中はパンジャブの穀倉地帯、バスは麦畑の中をビュンビュンとスピードを上げ、思わず前の座席の背もたれにしがみつきたくなるほどクラクションを鳴らし続けて飛ばして行きます。

パタンコットからは山道になり、断崖絶壁の谷を見下ろす山道をくねくねと登っては下り、下っては登

りして、少しずつ高度を上げてゆきます。

バニケットの峠で海拔 1,700m、この辺から気圧の関係で耳がおかしくなり、辺りの生態系も変わり岩の間に松が生えていたりします。やがて、遠くの山の緑の中に白い壁にカラフルな屋根のバンガロー風の洋館が点在しているのが見え始め、まるでダーズリンかシムラーの町を見る思いがします。そこがインド最西北端の避暑地ダルハウジーの町で、海拔 2,036m、町の中心から広い牧草地があるカジアルを經由してチャンバに向う道の両側には深さ 50cm ほどの雪が残っていて、インドで雪を真近に見たのは初めてでした。

カジアルからチャンバへは一気の下り道。それまでの暗い林道を抜けると、眼下にラビ川が流れるチャンバ溪谷が見えます。谷底から山腹のバス道路までは、段々畑が続き、そこには民家が点在し、道路沿いの桜のような花と桃の花とが同時に咲きそろった木々と、黄色い菜の花畑とのコントラストが春の風情を醸し出していて、まさにインドの桃源郷とも言える心地がしました。

6. チャンバの町

チャンバの町は南南東から北北西に流れるラビ川沿いの溪谷の東南の山の斜面に、川沿いに横長の台地が 2 段になって広がっています。町の中心は上段の台地に展開され、その中央にバダ・チョウガンと呼ばれる長方形の公園があり、公園に沿った西側の散歩道からは、眼下にラビ川の清流が見え、上流の東南方向はマニマヘシュの峰が遠望できます(主峰カイラーシュは 5,656m)。町を一望できる格好の場所は、前述の山の斜面中腹にあるチャームンダ・デーヴィ寺院の境内からです。

<写真：チャームンダ・デーヴィーの風景>

川床から山の斜面に沿って立ち並ぶ建物の中で一際目立つのは、緑色の屋根とアーチ型の大きな窓と白い壁の館で、西洋のお伽噺にでも出てきそうなアカンド・チャンディ・パレスです。先年、持ち主の旧マハラジャ(藩王)が州政府に売却して、今は州立カレッジになっているそうです。

その向う隣がラクシュミー・ナラヤナ寺院群で、シヴァ、ヴィシュヌ、クリシュナの 3 神を祀る 6 つの寺院があります。これらの寺院の特徴はシカラ形式とよばれ、きのこの傘を思わせる屋根と円筒状の本殿を持っている事です。

この寺院群は 10 世紀の中葉、チャンバの東南東 65km のバルモウルから遷都したサヒラ・バルマン王により建立されたものだそうです。

現在の建物は 16 世紀中葉のムガル王朝第 3 代アクバル皇帝の時代にチャンバ地方を治めていたプラタップ・シン・ヴァルマン王により修復されました。寺院群の場所は上記の州立カレッジの正門から坂を下った所にあり、学校の正門はアロマ・パレスホテルの裏手にあります。

この人口 2 万人強の小さな町に 21 の寺院が点在しており、往時の繁栄と共に人々の信仰の深さが窺い知れます。これら 21 の寺院の名前は町の観光局入り口の掲示板に書かれてありました。

7. チャンバ・ルマールとの再会

ラクシュミー・ナラヤナ寺院の神様に無事チャンバに着いたことへのお礼を述べて、いよいよ念願のチャンバ・ルマールの刺繍の先生を訪ねることになりました。ライさんに調べておいてもらった刺繍の先生の名前と住所をホテルのマネージャーに示すと、その方ならホテルから 5~6 分のところに住んでおられるとのこと、全く幸運でした。先生宅への道は迷路のように入り組んでいて探すのに苦労しましたが、お宅は直線距離にしてせいぜい 100m、意外と近いところにありました。

<写真：ヴァキル女史>



がっしりした体格の、でも気品のあるお顔立ちの、ラリタ・ヴァキル女史が笑顔で迎えてくれました。はるばる日本からの客人ということで、彼女自慢のカシミア・ティーとナッツで歓待して下さいました。私は S.D. シャルマ大統領から直に勲章を頂いたの」と、言って文化功労章の盾を見せて下さいました。沢山のトロフィーが飾られてある応接間で、彼女の作品を見せて下さり、その一枚を手にはしているお姿を写真に撮らせて頂きました。〈写真：ヴァキル女史〉

彼女はこのチャンバルマール刺繍の伝統を若い人達に引き継いで欲しいとの思いから自宅を開放して、伝統刺繍を教えているとのことでした。前述のチャムンダ・デーヴィ寺院参拝の帰途、今は州政府のエンポリウム(物産即売所)になっているラング・マハル〔古い宮殿〕に立ち寄りしました。受付で「チャンバルマールは手に入りますか」と尋ねたところ「奥の部屋で刺繍の実習をしています。よかったらご覧下さい」との返事があり、それなら是非拝見したいと、先生のお許しを得て実習を見学させて頂くことになりました。

この刺繍教室では伝統技法を継承しつつも、モチーフについては、必ずしも伝統にとらわれず、自由なテーマと構図を選び指導を行っているとのことでした。

ともあれ、私はチャンバルマールの伝統が若い女性達によって継承されているのを目の辺りに出来、いくつもの山を越えて遙々チャンバ行った甲斐があったと、今チャンバルマールとの再会の喜びを噛みしめているところです。

8. さよなら、愛しのチャンバ！

空澄み渡り、谷を流れる水は清く、菜の花と桃、桜もどきの花、春たけなわの桃源郷チャンバよ、遙か東の山並みには峻厳として聳えるカイラーサの峰が夕日を浴びて紅色に染まっている。人情こまやかにして、街を走るリキシヤもオート・リキシヤも無く、環境にやさしい町。少女たちは伝統刺繍のチャンバルマールに勤しみ、無心に針を運ぶ。又来る日まで、同じ姿を保つことが出来るのだろうか？そうあって欲しいと祈りながら、チャンバの町にさよならをした。

帰路は、ロイさんの願いを入れて、町の観光局にお願いし、ダラムサラまで車を一台、運転手付で雇うことにしました。運転手と交渉の結果、1,700 ルピーで行ってくれるという約束でしたが、私どものホテルはダラムサラから更に一山登ったところにあつたので、車を降りた際にチップとして 300 ルピーを渡しました。〈写真はジョート峠から南方チャンバの方角〉



帰路はパタンコットからチャンバに入った道とは別の近道でしたが、それでも途中標高 1,670m の ジョート (Jot) 峠で一服してからも、更にいくつもの峠を超え、時には山の峰を巻きながら、徐々に山を下って行きました。途中、飛行機が着陸するときを経験するような、気圧の変化による耳鳴りがして、ロイさんは少し気分が悪くなったといっていました。大型バス 2 台ではとてもすれ違いが出来ないほどの道幅で、断崖絶壁の谷底を眺め、何とか無事に麓の村に着くようにと祈りながらのドライブでした。

途中石楠花に似た、現地の人がチュウと呼んでいる紅色の花〈左写真〉をつけた木々のトンネルの中を車が縫って走るよう

なところもあり、私たちの目を楽しませてくれました。運転手によると、「花びらは漬物にして食べる事も出来ますよ」と、言っていました。

9 時半にチャンバのアロマパレス・ホテルを出発し、昼めしは道路沿いのダーバー〔運転手さんがよく立ち寄る軽食堂〕でたべることにしました。タンドゥール〔大きな素焼きの壺状の焼き釜でチャパティを目の前で焼いてくれ、おかずはダル〔豆カレー〕と野菜のサブジー〔カレー味・野菜炒め〕、飲み物はラッシーで舌鼓を打ちました。そうした時間も含め、6 時間 10 分の快適なドライブで、無事マックロード・ガンジのホテル・インディア・ハウスに 3 月 14 日 3 時 40 分に着くことが出来ました。

9. ダラムサラで思わぬ体験

ダラムサラの町は標高 1,219m で、一山登ったところに奥の院ならぬ標高 1,770m のマックロード・ガンジの町があります。標高差は 551m あります。ガイドブックによると、後者はダラムサラから 10km 上にあり、チベット亡命政府本部があるガンチェン・キシヨン (Gangchen Kyishong) [第 14 世ダライ・ラマ法王の居住地はこのラマ寺院境内の一角にある] は 4km 上とするされています。従ってマックロード・ガンジからガンチェン・キシヨンまでは 6km という計算が成り立ちます。



<写真：上記ラマ寺院からマックロード・ガンジ方向>



しかし、実際マックロード・ガンジの宿泊先からガンチェン・キシヨンまで歩いてみると、だらだらとした下り坂で歩き易く 15 分もかからなかったのですが、続いて寺院からダラムサラの町まで近道を下りてみた結果、ダラムサラのバス・ターミナルまでは急峻な坂道で 1 時間以上もかかってしまいました。つまり、山道を歩く場合直線距離だけでなく、山の斜面の勾配も配慮しなければならない事を、身をもって体験して次第です。この山道のほかに、車が通る舗装道路が 2 つあり、一つは尾根伝いに、時計回りに大回りしてマックロード・ガンジのバスの終点まで行くもので、他の一つは、右から左回りにラマ寺院の裏手を抜け、

やはりマックロード・ガンジの中心(上記のバスの終点)に出る道です。上記 2 つの町のいたるところでラマ僧の臙脂 [えんじ] 色の衣が目立ちます。それに欧米の観光客もレストランやバザールで数多く見かけました。伝え聞くところでは、現在インド在住のチベットの難民は当地と東部のダーズリンなども含め、25~6 万人いるそうです。ちなみに、マックロード・ガンジの名称は、英領インド時代にパンジャブの副総督であったデヴィット・マックロードの名前とヒンディー語のガーンジ(市場という意味：パンジャブ地方で多く使われている)が合わさって作られたといわれています。

翌日、亡命政府本部があるガンチェン・キシヨンのラマ寺院を参拝した際、門前には多くの若いラマ僧がその掲示板に張られてある写真を食い入るようにして見ていました。そして、街頭では宣伝カーを先頭にデモ行進するラマ僧と支援者たちが大声でシュプレヒコールを繰り返していました。チベットで暴動があったらしい。

私は彼らの叫んでいる言葉が分からなかったのですが、そう予感しました。そういえば行き交うラマ僧たちもどこと無く緊張していて、寺院に入っても人々の顔に明るさを感じられませんでした。本殿に昇り、参拝した後、本殿から下りて右側に、チベット博物館があったので、覗いてみることにしました。当初民族文化的な展示物があるのかなと思っていましたが、実際の展示内容は、1959 年 3 月にチベットで中国政府に抗議する大規模デモが発生し、これを中国政府が武力鎮圧した結果、14 世ダライ・ラマ他大勢のラマ僧たちが、ダラムサラに亡命するまでの経緯が、写真やパネルで展示・解説され、テレビによる映像でも見ることが出来るようになっていました。

ラマ寺院横手の舗装道路沿いに、和食を食べさせる店があると聞いていたので、立ち寄ってみたところ、「本日はチベット暴動鎮圧に抗議する為、休業します」という張り紙が入り口のドアにありました。

10. ダラムサラからチャンディガルまで、

ヒマチャル・パンジャブ縦断、ローカル・長距離バスの旅バスの中で思わぬ事件

3 月 16 日午前 8 時、マックロード・ガンジのホテルをチェック・アウトして、前夜予約しておいたタクシーに乗り込み、ダラムサラのバス・ターミナルへと向いました。20 分ほどでターミナルに着き、8 時 45 分にはチャンディガル行きのバスが到着しました。切符売り場でチケットを買いました、1 人分 185 ルピー [約 555 円] <国道 21 号線を利用すると、ダラムサラ - チャンディガル間の距離は約 250km : このローカル・バスは国道を離れ、ヒマチャル・プラデシュ州とパンジャブ州の主要な町々を縫うようにして走り、縦

断して行くので、走行距離は 300 km をこえるとおもわれます>それにしても、インドのバス運賃は安く、政府により庶民の足がきちっと確保されています。

我々のバスは午前 9 時 7 分に発車し、細密画で有名なカーングラー、ラニタル、ジャワーラームキー、などの町を通り、ピアース川を渡り、ムバラクプル、ウナを経て、チャンディガルには午後 5 時 15 分に着きました。途中の停車時間もいれて、なんと 8 時間 8 分の長旅でした。乗客は途中の町や村の停留場で乗っては降り、入れ替わり立ち代りして、いろいろな人が乗ってきました。その中で、ある事件が起きました。

始発駅ダラムサラで乗った乗客のうち、私のすぐ後ろの前から 3 列目の窓側の席に、若い小太りで中背の娘が座り、その隣りに母親らしき人物、私の席の隣にロイさんが座りました。我々の席は運転席側で、3 人がけになっています。通路を挟んで反対側は 2 人掛け、つまり新幹線スタイルでした。ですから、私はどんな人が乗ってきたかすぐに分かる位置におりました。

初めは席がばらばらと空いた状態でしたが、すぐに満席となりました。後ろの親子は現地語でしきりに話し合っていました。そのうち会話がとぎれ、娘はテープレコーダーで少し音量を小さくして、歌を口ずさんでいました。流行の映画音楽のようでした。二人の会話と歌声から、あまり周囲には遠慮しないタイプのモダン・ギャル風の印象を受けました。彼女の歌の練習は止む事が無く続いています。ロイさんもこの親子に興味を持ったのか、後ろの席の母親に娘の事を尋ねています。娘はムンバイのデザイン学校で勉強中、将来はファッション・デザイナーかタレントを目指しているのだということでした。家はチャンディガルにあり、娘が休暇で一時帰ってきたので、ダラムサラ観光にやっできて、いま家に帰るところだそうです。母親は娘の将来に大いに期待していると、親バカ丸出しで娘の才媛振りを誇らしげに話しています。こちらは、少し調子はずれの才女の歌声に終点のチャンディガルまで付き合っただけゆかねばならないかと、半ばあきらめていました。

事件発生! バスはヒマチャルからパンジャブに入って、ターバンを巻いた男たちや、がっしりとした体躯のシクの女性がガ乗り込んでくる。降りる客が少なくなり、乗ってくる客は多くなる一方で、運転手は、子供や年寄りのために、運転席の脇の普段は乗客の為のスペースではないところにまで、席を設けて優先的に座らせてあげている。混雑はますますひどくなり、後部にいる車掌が乗車券を拝見し、切符を売ることすら困難になるほど混んで来た。そして、ある村の小さなバス停で、身の丈 6 尺、すこし痩せているが、精悍な顔に鋭い眼差し、頭に白いターバンを巻き、淡いこげ茶色の、くるぶしまである長めのクルターに細い木綿の白のズボンをはいた老人が乗り込んできた。手にはごつごつした固い木の枝をそのまま切っただけの杖を持っている。バスの入り口のドアの下のステップの上に立つのがやっとの状態だ。周りの人が気遣って、少しずつ中に入れてあげる。私の座席の列のところまで入って、片手で座席の背もたれをつかんでいるが、バスが大きく揺れる度に、爺さんの体も揺れて、満員の乗客の体で爺さんの体を支えている状態だ。私の後ろの座席では、例の娘がテープの音に合わせ、歌の練習に余念が無い。爺さんの顔に苦渋の色が見える。自分が苦しんでいるのに、独りポップソングを歌っているのが面白くないのか、それとも西洋音楽が嫌いなのか。次の停留所では、更に多くの乗客が乗り、爺さんはもっと奥へ押しやられた。その時である、爺さんの杖が後ろの娘に向けられて、彼はなにやら叫び出した。多分パンジャビー語なのであろう。ロイさんにどうした事なのかと聞くと、“娘は席を立てて年寄りの自分に席を譲れ”と、言っているのだという。すると、娘は歌をやめ、機関銃のような速さで爺さんに食ってかかっている、席を譲る気配なぞ毛頭無さそう。隣の母親まで娘の援護射撃をして、“我々は始発から終点迄の長旅なのだ”と娘をかばっている。老人はますます興奮し、将に杖で殴らんばかりの形相だ。ロイさんの話だと、“腕力にかけても、娘をバスから引き摺り下ろしてやる”といきましているそう。周りの乗客はしきりに爺さんをなだめている。バスの後部にいた車掌がやっとな満員の乗客をかき分け、かき分けして、爺さんのそばまでやっできて、娘の母親の隣に座っていた男の人に頼んで、爺さんに席を譲ってもらった。爺さんは未だ大声で娘に何か言っているが、娘の方も負けてはいない。毅然と言い返している。そのうち爺さんは顔を真っ赤にしながらも、だまりこくってしまった。終点近くなって、後ろの席が空くと、爺さんはそちらの席に移ってしまった、例の、がっしりとした体躯のシクの女性は、娘の方をにらみつけながら途中でバスを降りていった。娘も歌うのをやめてバスの中に静寂が戻った。私はこの小さな空間の中の出来事により、最近のインド社会の変化を、まざまざと見せつけられた思いがした。

11. チャンディガルにて

チャンディガルに着いて、ホテルからアンジェリー・デオダール女史に、「今、無事につきました」と、電話を入れました。女史の弾んだ声が電話の向こうにありました。「息子が結婚したのよ、今晚、娘〔息子の嫁〕も一緒に連れてゆくから、新婚さんにも会ってね。」その晩遅くまで、ロイさんも入れて、デオダール

老夫妻、息子夫婦共々、ワインを片手に語り合い、私は楽しくも厳しい西北インドの旅の締めくくりにあつたさわしい一時を、心行くまで楽しみました。

ちなみに、老夫妻は共に医学博士です。アンジェリー女史には、故 S.B. ヴァルマ博士(ネルー大学日本語科主任教授・印日友好協会会長を長く勤められた方)から、博士がお亡くなりになるすこし前にヒンディー語の俳句仲間として紹介されました。アンジェリー女史は一昨年、愛媛県松山市で世界俳句大会があった際来日され、拙宅に一晩お泊めして差し上げたことがありました。

12. 旅の終わりに

こうして、アンジェリー女史の家族ともお会い出来、チャンヂガル 10時30分発、デリー14:50分着のビジネス特急(シャタブディ・エクスプレス: 全座席指定の椅子席スタイル)で、無事9泊10日間の西北インド周遊の旅を終える事が出来ました。なんと言っても、O.P. ロイさん(Mr. O. P. Ray)の助力があったからこそ、楽しい旅をすることができました。いやロイさんにとっては厳しい、苦痛を強いられた旅であったと思いますが、我慢して、最後のデリー民芸館にも付き合ってくださいました。心から感謝いたしております。

<写真: ニューデリー・インド民芸館にて、右端は O.P. ロイ氏>

<旅人:(財)日印協会・非常勤理事 鹿子木謙吉 2008年6月3日 記>



4. <様々なインド>第18回 『インドとわたし』

菊池龍三 新常務理事・事務局長

(元コルカタ及びチェンナイ総領事、前ウガンダ大使)

1. ヒンディー語との訣別

インドについて何からお話したら良いかわかりませんが、アラハバードで3年間もヒンディー語を勉強させていただきながら、ヒンディー語の勉強をやめてしまい、「インドの言葉を知らないインド専門家」と皮肉をいわれるようになったことについて、まずお話ししたいと思います。

研修生時代には牧野一穂さん(アラハバード農業研究所)、溝上富夫君(のちに大阪外国語大学教授)、坂田貞二さん(のちに拓殖大学教授)等と親しくお付き合いさせていただき、またデリーでは田中敏雄さん(のちに東京外国語大学教授)と一時期生活を共にさせていただいたのは、私の青春時代の貴重な財産であり、当時は私もそれなりに一生懸命ヒンディー語の習得に努めておりました。大使館勤務においても出来るだけヒンディー語を使うように努め、インド外務省の役人にもヒンディー語で話しかけたのですが、相手は英語で応えてきます。しばらく私がヒンディー語で話しかけ相手が英語で応えるという奇妙な会話が続きました。ヒンディー語が分からなければ会話も成立しないはずなのになぜ英語で応えてくるのか分かりませんでした。

後で分かったのは、高級官僚等自分は教養があると自負している人達は、教養を示すためか英語で話したがるといふこと、多言語国家であるインドでは、最も通用する言語は英語であると知ったのです。私は言語学者になるつもりも、その能力もありませんでしたので、これまで買い込んできたヒンディー語の辞書小説等すべての書籍類は田中さんを通じ東京外国語大学に寄贈してしまったのです。

2. 西ベンガル州へ

1976年6月、私はコルカタ総領事館に首席領事として赴任しました。これは私にとって2回目のインド勤務でしたが、いろいろな点で貴重な体験をさせていただきました。

当時のコルカタは血で血を洗うナクサライト旋風が収まって間もないころで、研修時代に訪問した際目にした大都会の輝きはすっかり失われており、街は暗く沈んでいて、これがあのコルカタかと息を飲む思いでした。

1977年、CPI(M) (インド共産党マルクス主義)が西ベンガル州の政権の座についたため、インドの財界人は次々にコルカタから逃げ出していました。東銀、インド旭ガラスは健在で、三井、三菱、住友、伊藤忠、日商岩井、大倉商事、丸紅、東綿等の商社の士気も高く、日本人学校には生徒は12~3人ながら4人の先生ががんばっておられました。コルカタの停電は1日15~6時間に及び冷蔵庫やエアコンがほとんど用を足さない状態で、子供達は暗くなるまでコルカタ・スイミングクラブで過ごしていました。このような厳しい生活環境でしたが、ベンガル人は歌や踊りを愛し、情熱的で誠実な人が多く、タゴールに代表されるベンガル文化の中心地コルカタは、私にとって新たなインドを発見する思いでした。

この時期、私にとって忘れられないのは、1975年非常事態を宣言し、強大な権力者として君臨していたインディラ・ガンディー率いる कांग्रेस党が、1977年の総選挙で大方の予想に反して大敗したことです。この敗因については色々分析がなされていると思いますが、私は、インディラの次男サンジャイ・ガンディーの行ったパイプカットだと思っています。サンジャイは、母親の威を借り横柄傲慢な行動をする男でしたが、産児制限を急ぐあまり、こともあろうに貧しい人々を川原に駆り集め、強制的にパイプカットを行ったのです。これは幼児死亡率の高いインドでは子孫の絶滅を意味し、貧しい人々は恐慌をきたしました。サンジャイのこのパイプカット事件はロコミであつたという間に全国に広がり、 कांग्रेसの大敗の要因となったと思っております。

3. インディラ・ガンディー首相の暗殺

1984年8月、私はインド大使館へ政務担当官として赴任しました。当時大使館には堀本武功さん(国会図書館調査及び立法考査局長を経て現尚美学園大学教授)が専門調査員として活動されており、一緒にマージャン卓を囲んだりして、楽しく交流させていただきました。

この時期特記すべきは、インディラ・ガンディー首相の暗殺でした。インディラは、1977年の総選挙に敗北したあと、3年後の総選挙で勝利し、首相に返り咲いていたのですが、シク教徒にとって最も神聖なゴールデン temple に軍隊を突入させ、カリスターン建国を目指して同寺院に立て籠もっていたシク教徒過激派武装勢力を排除したため、これに対する報復として、1984年10月シク教徒護衛兵の銃弾に倒れたのです。首相が護衛兵によって暗殺されたことはショックでしたが、この事件を引き金として、インド各地でヒンドゥー教徒によるシク教徒の虐殺が行われたことは、私にとってより大きなショックでした。

ニューデリーでも、これまで隣人同士仲良く暮らしていたヒンドゥー教徒がシク教徒を殺害し、火をつけて回わり、空が赤く燃えていました。私の家に逃げ込んでおどおどしていた近所のシク教徒の家族の姿が忘れられません。宗教の恐ろしさを痛感させられました。

1987年9月インドを去るにあたり、24年振りにアラハバードを訪問しましたが、大学も大学の近くの汚いコーヒーショップも、シヴィルラインの商店街もチョーク通りの喧騒も、ジャムナ河に沈む真っ赤な夕日も、まるでデジャブのように昔のままでした。その時私の胸に去来したのは、「悠久のインド」、「発展から取り残されたインド」、という一種諦めの気持ちでした。

4. コルカタの復興

インドを離れて12年半ぶりに、私は総領事として2000年4月コルカタの地を踏みました。驚いたことに、あのコルカタが見違えるような変貌を遂げていたのです。テレビを付けてまじりくりにしたのはチャンネルが100以上あり、CNN、BBC、といったニュースはもとより、ゴルフ、サッカー、テニス、野球等のスポーツ番組、映画等の娯楽番組、NHKも見ることができるのです。その昔デリーでは公営テレビ局が朝昼夕に時間を限って放送していたにすぎなかったのです。また、大声で叫ばないと聞こえなかった国際電話も、東京で市内電話をするように良く聞こえるのです。街にも着実に変化が見られました。ピザハウスやモダンなコーヒーショップには若者が群がっており、チョウランギー通りを着飾って歩く人々の表情も明るく、コルカタは、かつてラジーブ・ガンディーが評した「死にゆく街」ではなく、インドも「悠久のインド」から着実に脱皮しはじめていたのです。

このコルカタの変貌は、四半世紀におよぶ長期政権下での権力の驕りを野党やマスコミから厳しく追及

されていたジョティー・バスに替り、ブッダーデーブ・バッターチャルジーが西ベンガル州の首相に就任し、翌 2001 年 6 月の州選挙で大勝してから、そのスピードを一段と加速させていくのですが、西ベンガル州政権が共産党マルクス主義であるが故に、日本の財界人はその事実をなかなか認識しようとしませんでした。

私はブッダーデーブにお会いし、その誠実な人柄と西ベンガル州の経済を何としても発展させたいという情熱に打たれ、この人の下で西ベンガル州は必ず発展すると確信し、日本の政財界の要人にぜひとも同人に会っていただき、その人柄を理解していただきたいと思い、2001 年 10 月日本に招待したのです。ブッダーデーブにとっては初めての先進国訪問であり、日本の伝統文化や経済発展に目を奪われた由で、以来同人は日本の良き理解者となり、ハルディアの三菱化学工場をモデルケースとして必ず成功させねばならないと、自ら陣頭指揮してきた点についてはご存知の方も多いのではないかと思えます。

このように、ブッダーデーブの日本訪問は日本を理解せしめ、心強い親日派の州首相を誕生させる点では成功しましたが、日本の政財界人に西ベンガル州共産党政権の実態、経済発展についての展望に対する認識を大きく変えることには残念ながら成功しなかったようです。

インドのビルラ、タタ、ゴエンカ、ダルミアといった財閥や若手の経済人がブッダーデーブ州首相こそ西ベンガル州の経済発展を可能とする指導者であると信じ、コルカタに舞い戻り、大きな事業を展開しつつあり、コルカタがかつての栄光復活に向けて大きく変化しつつあるにもかかわらず、当時の大手商社等はコルカタからの撤退を考えていたのです。

このような状況をなんとか打開したいと考え、平林大使ともご相談し、S・K・ビルラの協力を得て、これまでデリーで開催してきた日印経済合同委員会をバンガロールで開催し、帰国の途次、日本側代表団の中で関心ある人達にコルカタを訪問していただき、コルカタの現状を実際に見てもらい、ブッダーデーブ州首相と親しく懇談していただくことにしたのです。

ブッダーデーブは使節団が宿泊するホテルに自ら出向き、説明会やカクテルレセプション開いて、初めて迎える日本からの経済使節団を心から歓迎しました。ブッダーデーブの人柄に触れ感銘を受けた人も多かったようですが、しかし、流れは変わらず、コルカタから、住友、日商岩井が次々と撤退し、あの東京銀行ですら、突然コルカタから去ってしまったのです。(三井、三菱商事は日本人駐在員を引き上げたが、事務所自体は存続。)

当時、ある商社マンから「官がいくら動いても民が動かなければ何も変わらない。」と言われ、むなしい思いをしたのを記憶しています。

西ベンガル州の経済発展を正しく展望し、2000 年にハルディアに大型投資(約 420 億円)をし、石油化学プラントを建設したのは三菱化学であり、コルカタに踏み留まったのは丸紅であり、後から駐在事務所を復活し、2 人の日本人駐在員を常駐させたのは伊藤忠でした。また、三菱化学、丸紅は 2002 年の印パ核戦争の危機の際も、コルカタに留まり仕事を中断させなかったことで、州首相からも高い評価を受け、現地で大いに名を挙げたのです。

他方、当時、外務省にもコルカタ総領事館を閉鎖しようとする動きがあったのです。インドの文化の中心地であり、東インドの政治経済の要衝の地コルカタにある日本総領事館を閉鎖するのは、日本にとって自殺行為に等しく、これを許すことは絶対にできません。本省と掛け合い、コルカタ総領事館は幸いにして維持されることになりましたが、もしそうでなかったらと思うと、今でもぞっとします。

5. 南インドへ

私はコルカタに骨を埋めるつもりだったのですが、2002 年 12 月チェンナイ総領事館へ配置換えとなりました。チェンナイ総領事館はタミールナド州、アンドラプラデーシュ州、カルナタカ州、ケララ州、ポンデチェリ直轄地と南インド全体を管轄しており、この未知の南インドで見聞を広めることができることになったのは、私にとって大きな幸運でした。

これまでの私の南インド人のイメージは、ドラヴィダ人の体型、風貌からして知的能力がやや劣るのではないかというものでした。しかし、赴任して驚いたのは、チェンナイは高度の脳手術や心臓手術が可能で、東南アジア諸国から多数の医学生を受け入れており(マレーシア領事館はもっぱらこれら医学生をお世

話するためだそうです。) 脳外科、心臓外科、泌尿器科等の学会もチェンナイで頻りに開かれて欧米や日本の学者も参加しており、チェンナイは正に医療の中心地であったのです。また、チェンナイはインドのデトロイトと言われており、自動車産業が盛んで、米国へも大量の自動車部品を輸出しているのです。(外国企業ではフォード、ヒュンダイが進出。)

アンドラプラデーシュ州については、州都ハイデラバードを訪問し度肝を抜かれました。と言うのは、かつて訪問した当時の迷路のように混沌とした街並みと雑踏が一掃され、整然とした道路が走る都市に変貌していたからです。ナイドゥ州首相の話聞いてさらにびっくりしたのは、この区画整理され、公園を随所に配したIT産業都市はわずか5年で完成したというのです。政治の力、なにかんずく州首相の権力の大きさ、「インドでもやればやれるのだ」ということを実感しました。

カルナタカ州については、バンガロールのIT産業が有名で、多くの日本企業が進出しており、トヨタも同市の近郊で自動車を生産していますが、バンガロールは都市として機能麻痺の状態になりつつあり、政治の貧困、リーダーシップ不足からIT産業もいずれ、ハイデラバード、チェンナイ、コルカタに移っていくのではないかと危惧されていました。

「神様はカシミール人に白い肌を、パンジャブ人に彫りの深い顔をと次々とプレゼントを与えてきて、最後に残ったドラヴィダ人には知能というプレゼントを与えたのだ。」と、チェンナイの友人は言っていました。あの世界的に有名な天才数学者ラマルジャンも南インド人です。いずれにせよ、南インドがこれからインド経済発展の機関車となっていくのはまず間違いなさであろうと実感しました。

私はインドを去るにあたって、チェンナイとバンガロールにそれぞれ日印商工会議所を立ち上げてきました。これは、「官が動いても、民が動かなければ何も変わらない。」といわれた言葉を噛み締め、大きく経済発展する可能性のある南インドにおいて、日印の民同士が協力しあって経済協力関係を飛躍的に発展させることを期待したからに他ありません。

6. 最後に

私は、2005年3月15日、定年退職直前に駐ウガンダ特命全権大使に任命され、初めてアフリカの地を踏むこととなったのですが、ウガンダに赴任して、改めてインドの大きさ、インドの多様性を実感しました。

インドの1州である西ベンガル州やタミールナド州は、ウガンダの何倍も大きい国と言っても過言ではありませんし、各州から成るインドと各国からなるとアフリカを比較しても、インドの方がはるかに多様に富んでいると感じたからです。

インドのプロトコール上、州首相は中央政府の閣内大臣と等しく扱われていますが、西ベンガルやタミールナドといった大きな州の首相は閣内大臣を超える存在といえるのです。しかし、日本のプロトコールでは州首相は日本の県知事相当に扱われており、先にブッダーデーブ西ベンガル州首相が訪日した際も、総理大臣はもとより、官房長官、外務大臣にも表敬できなかったのです。ブッダーデーブは温厚な人で、私が「無理して政府要人に会う必要はなく、会ってくれるという人と会えばよいのです。いずれ、時が経てば先方の方からあなたに会いたいと言ってくるでしょうから。」と申し上げたところ、笑って、私にすべてを任せてくれたのです。

しかし、政党の有力指導者でもある州首相のなかには、「総理大臣に会えなければ訪日しない。」と駄々をこねる人(アンドラプラデーシュ州ナイドゥ首相、カルナタカ州クリシュナ首相)の方がむしろ一般的と言えるでしょう。

日本の政財界人の多くはインドの中央政府との接触を重視していますが、(もとより、中央政府が自由化政策に踏み切ったからこそ、今のインドの発展が可能となったのですから、中央政府が果たす役割の重要性は充分承知していますが)、インドはヨーロッパ諸国、アフリカ諸国より多様に富む州から構成され、州政府の権限が強く、具体的に日本企業がインドに進出するにあたっては、州政府の方がより重要となってくるのです。ちなみに、外国企業にいかなる優遇措置を与えるか、外国企業が諸々の困難な状況に陥ったときにいかに助けてくれるかは、すべて州政府のさじ加減で決まるのです。この点で、強大な権限を有する州首

相は、インドに進出しようとする日本企業にとって極めて重要な存在であります。したがって、日本の政財界人は、州首相を始めとする州政府要人との接触をより緊密にしていくことの重要性を認識され、インドを訪問する際は、できるだけ地方にも足をのぼしていただきたいと思います。また、州首相が日本を訪問する際は、日本のプロトコールにとらわれず、一国の首相に準じた扱いをしていただきたい(最低限でもインドのプロトコールを尊重し中央の閣内大臣扱いとしていただきたい)と思います。

〈菊池常務理事・事務局長のプロフィール〉

昭和 16 年 5 月 12 日日立市生まれ。水戸で育ち水戸一高校卒業し、茨城大学政経を 3 年で中退し 38 年 4 月外務省入省。同年 8 月から約 3 年間インドのアラハバード大学にてヒンディー語を研修したのち在インド日本大使館に勤務。それ以来、インド駐在期間は通算 16 年に及ぶ。本省勤務は国連局、条約局、経済局、領事局、参議院事務局に約 16 年。インド以外の海外勤務は北米地域(ヴァンクーヴァー、ワシントン、ホノルル)に約 10 年、ウガンダに 2 年半。主要職歴は、条約審査官、参議院渉外課長、コルカタ総領事、チェンナイ総領事、駐ウガンダ特命全権大使。



5. インドニュース

* 7月7日(インディアンエクスプレス紙)

ジャンム・カシミール州はヒンドゥー教団体への土地譲渡問題をめぐり混乱した状態が続いており、6月28日ムフティ・モハマド・サイード前州首相が率いるPDPが कांग्रेस党主導の連立政権から離脱したため、7月7日アザド州首相は辞任した。ジャンム・カシミール州は大統領直轄下に置かれることとなろう。

* 7月8日(インディアンエクスプレス紙)

CPI(M)、CPI 等左派 4 党は、シン首相の国際原子力機関との保障措置協定締結の動きに反発し、シン政権への閣外協力を撤回することを決めた。この動きに対し、北海道洞爺湖サミット拡大会合に出席のため来日中のシン首相は、左派 4 党の離脱は政権の安定に影響を及ぼすものではないと述べた。社会主義党(SP)は先に米印原子力協定については与党たる UPA 政権を支持する方針を表明していたが、SP 党 39 議員の内何人かの議員は党決定に反し独自の行動をとると表明している。

* 7月9日(インディアンエクスプレス紙)

北海道洞爺湖サミット拡大会合のため来日中のインドのシン首相は 8 日中国の胡錦濤主席と会談し、米印原子力協定の発効へ向けて、国際原子力機関と原子力供給グループ内の中国の協力を求めた。胡錦濤主席は民生用核エネルギーに関しインドと協力する用意がある旨伝えた。

* 7月9日(外務省発表)

日本・インド首脳会談(概要)

7月9日(水)17時50分から約40分間、福田総理は、洞爺湖サミット関連会合に出席するために来日したマン・モハン・シン インド首相との首脳会談をおこなった。

冒頭

○福田総理から、来日を歓迎する旨述べるとともに、7日のアフガニスタンでのテロ事件でインド大使館の職員が犠牲になられたことにお悔やみを申し上げ、引き続きインドとともにテロに立ち向かっていくと述べた。また、本日の一連の会合について、気候変動や世界経済、エネルギー問題、食糧問題について

で有意義な議論を行うことが出来たと述べた上で、シン首相の積極的な協力を謝意を表した。

○これに対し、シン首相から、テロ事件への弔意に対する謝意とともに、サミットに参加するのは4回目であるが今回が最も生産的なサミットであった。これほどまでに「参加した」という実感を得たのは初めてのことである。このような最高レベルの成功をしたサミットの議長を務められたことにお祝いを申し上げるとの発言があった。

二国間関係

○福田総理から、日印関係強化に向けた様々な取組みが進んでいることを歓迎する。インドとの関係強化は日本外交の最重要課題の一つであり、アジアの地域協力や国連安保理改革、気候変動、WTO などに関する協力を含め、日印間の戦略的グローバル・パートナーシップを更に実質化させるべく協力していきたいと述べた。

○これに対し、シン首相から、日印関係は更なる活性化の余地がある、日本からの投資を更に呼び込むために最大限努力したいと述べた。また、日本の ODA に感謝している。デリーメトロは日印協力の輝かしい成功例であり、貨物鉄道案件やデリー・ムンバイ間産業大動脈構想の実現に引き続き協力していきたいと述べた。

○この関連で、福田総理から、日本企業の活動にとっての電力等インフラの重要性に言及したのに対し、シン首相から、「電力およびインフラの重要性は十分認識しており、引き続き努力する」と述べた。さらに、シン首相から、民生用原子力協力に関する米印合意の経緯について簡単に説明があると同時に、今後、この案件が IAEA 等に持ち込まれる場合には、日本の支持をお願いしたいと述べたのに対し、福田総理から、検討するが、我が国を含む国際社会の関心にも適切に対応することに期待する旨述べた。

○また、福田総理から、シン首相が年内にあらためて訪日することを期待している。今回は忙しい日程であったが次回は是非ゆっくりとした日程でお越し頂きたい、シン首相の次回の訪日成功に向けて経済連携協定(EPA)交渉を加速化していきたいと述べた。

○これに対し、シン首相から、次回の訪日を楽しみにしている、日本との EPA にはインドの産業界からも強い支持があると述べた。

気候変動、エネルギー、食料安全保障

○福田総理から、気候変動、エネルギーや食糧安全保障の問題について、引き続き協力していきたい。特に気候変動問題についてインドと緊密に協力していきたいと述べた。

○これに対し、シン首相から、気候変動問題という非常に重要な問題について日本が強いリーダーシップを発揮していることに敬意を表する、インドは気候変動問題に関する国家計画を発表したところである、引き続き日本と協力していきたいと述べた。

*7月11日(読売新聞)

三井住友銀行がインドに再進出し、アジア戦略を一段と強化することが11日明らかになった。ニューデリーに設立した現地法人で大規模事業向け融資の関連業務を手がけるほか、インドの政府系金融機関と業務提携する。インドは経済成長が著しく鉄道、港湾など社会資本整備の大プロジェクトが相次ぐ。欧米金融機関が優位に立ってきたインド市場での事業拡大を目指す考えだ。

*7月12日(ヒンドゥー紙、タイムズ・オブ・インディア紙)

6月28日の週の卸売り物価インフレ率はその前の週の11.63%から上昇し、11.89%となった。これは13年来の高さで、インド準備銀行(RBI)は月末に更なる金利の引き上げを行うであろうと、金融筋は予測している。

*パレスホテルで本場インド料理フェア

ゴールデンウィークの最中に、インド・ニューデリー中心部に位置する、ファイブスターホテル The IMPERIAL, New Delhi 内のインドレストラン『The Spice Route』から、シェフのビノッド・クマール氏を招いて、エア・インディア主催のインドフードフェアが、東京のパレスホテル内にて、開催された。同ホテルはラグジュアリーホテルとしてニューデリーでも有名で、館内の『The Spice Route』は、アメリカの有力旅行雑誌 Conde Nast Traveler では、世界のトップ10 レストランにも選ばれている、非常に人気と伝統のある、由緒あるレストランである。このフードフェアに平林理事長が招待を受けた。今回は、南インド料理が主体であったので、タンドールによる肉料理は無かったものの、典型的な本場インド料理を味わうことが出来た。ビュッフェスタイルであったが、歴史と伝統に育まれた味が盛り沢山の味を楽しむことが出来た。著名なインドのレストランシェフ直々に手を下した、久し振りの本格的なインド料理の数々であった。



〈本場のスパイス王国インド料理〉



〈松本マネージャー、Mr. Kumar と一緒に〉

*南インド舞踊「クーリヤッタム」～2008～8月公演

クーリヤッタムは南インド、ケララ州に伝わる、世界最古ともいわれるサンスクリット舞踊劇である。古代インドの舞踊は踊り、音楽を一体として神々に捧げるものとして認識されていた。この舞踊は、1000年を超える伝統、カタカリとも相通づる独特の化粧や衣装の様式美、豊かな感情を秘めた繊細な身体表現、クーリヤッタムは独特の伴奏打楽器が奏でる古くて新しい芸能といわれる。インドの長い歴史の中でクーリヤッタムはさまざまな危機を乗り越えて現在に至っている。日本で久しく上演が途絶えていたが日本でも多くの人にこの芸能を知ってもらうために、今般、クーリヤッタム2008年日本上演委員会により、(財)梅若会の協賛を得て公演の運びとなったもの。8月10日(日)には叙事詩マハーバーラタから新作「砕かれた腿～ドウルヨーダナの最後」を、8月11日(月)にはラーマーヤナから古典「搭門の戦い」を東京の梅若能楽堂で公演する。続いて岡山、兵庫、京都、愛知、名古屋等で順次、公演予定。

照会先：クーリヤッタム2008年日本上演委員会 事務局 斉藤さんまで。電話：03-6802-6691

7.

新刊書紹介

* 『ヒンディー文学(1号、2号、3号)』

発行：日本ヒンディー文学会(代表 田中敏雄)

編集：石田英明

事務局：大東文化大学国際関係学部ヒンディー語研究室

頒価：500円(送料300円。2冊以上は別料金)

2008年は東京外国語大学でインド語科が開設されてから100年目にあたる。これを契機として今日までに多くの学生が育ち、インド人の先生方との交流を深め、南アジアとの交流の礎となってきたことは間違いない。インド政府の肝いりで催されるヒンディー語の普及と国際交流のための第8回世界ヒンディー語大会は昨年7月にニューヨークで、世界各国から参加者900名を集め、バン国連事務総長の出席があり盛大に開催された。会議に出席された溝上富夫氏(大阪外国語大学ヒンディー語教授)の会議報告が寄贈いただいたヒンディー文学3号に詳しい。ヒンディー文学は創刊されてから3冊目となるが、構成はインド人の研究論文、小説などの著作の翻訳と解説、日本の研究者による研究論文や報告からなる。



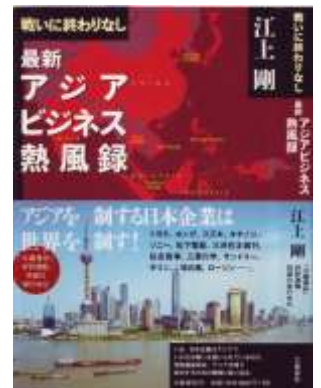
* 『戦いに終わりなし 最新ビジネス熱風録』

著者：江上 剛

発行：株式会社 文藝春秋

定価：本体1,400円+税

まずもって本の題名が刺激的である。21世紀はアジアの時代という言葉は最近のインド、中国などの目覚ましい経済成長をみると現実味を覚える。作者の言葉を借りれば、かつて著者が勤務した会社ではアジア圏での取引で国際部門の収益の大半を稼いでいたにもかかわらず、海外勤務の国際派の本流は欧米指向であった。日本はアジアの一員と言いながら、顔はアジアで心は欧米というぬえ的な存在ではなかったかと鋭く喝破している。しかし、アジアを制する者は世界を制するという言葉はいまや現実味を帯びてきた。反面、日本のアジアとのかかわりあいはどうであろうか。作者は、自分の目と足で、現在のアジア諸国の市場の状況を直接確かめることで、日本の進むべき道を見極めることとした。訪れた国はインド、韓国、インドネシア、シンガポール、タイ、ベトナム、中国の7国に及び、台頭するインドなどの新興国と日本はどういうスタンスで付き合うべきかを論じている。



* 『デリー 路上生活者の子供たち』

著者：牧野由紀子

発売：株式会社てらいんく

発行：アーチャー子ども村を支える会

定価：本体1,500円+税

世界に誇る近代都市になったデリーに、路上生活の子供たちがウロウロすることは、インドの恥になるのでしょうか。彼らための施設があること自体、目障りなのでしょうか。支配者の視線になった行政のために、家族や社会、政府からも捨てられたことも達はどこへ行くのでしょうか。

アーチャー子ども村を支える会・連絡先

世話人：四津明美

事務局：〒335-0003 埼玉県蕨市南町4-6-23 四津様方

Tel/Fax：048-443-4837

E-mail：yotsus22@ybb.ne.jp

ホームページ：http://www2.ocn.ne.jp/~ashavill



8.

日印貿易概況

輸 出 総 額 (日本 → インド)	2007年1~3月 第1・四半期	2008年1~3月 第1・四半期	輸 入 総 額 (インド → 日本)	2007年1~3月 第1・四半期	2008年1~3月 第1・四半期
	151,877	201,707		122,906	150,668
食 料 品	58	54	食 料 品	16,517	22,127
原 料 品	1,742	2,241	魚介類	6,768	7,032
鉱物性燃料	4,341	16,529	(えび)	4,603	4,236
化学製品	17,336	18,661	肉類	-	-
有機化合物	5,925	6,404	穀物類	33	36
医薬品	544	645	野菜	35	44
プラスチック	5,540	5,257	果実	835	872
原料別製品	30,435	36,275	原 料 品	28,815	31,498
鉄鋼	20,444	20,886	木材	27	39
非鉄金属	1,366	1,221	非鉄金属鉱	2,282	3,030
金属製品	2,731	8,246	鉄鉱石	18,486	19,332
織物用糸・繊維製品	1,678	1,774	大豆	-	-
非金属鉱物製品	1,171	1,518	鉱物性燃料	21,133	51,244
ゴム製品	2,550	1,960	原油及び粗油	-	-
紙類・紙製品	493	650	石油製品	21,133	51,244
一 般 機 械	51,803	65,330	(ナフサ等)	21,130	51,244
原動機	7,218	9,541	石炭	-	-
電算機類(含周辺機器)	614	749	化 学 製 品	9,774	8,811
電算機類の部分品	402	354	有機化合物	5,812	4,648
金属加工機械	9,741	13,903	医薬品	383	502
ポンプ・遠心分離器	4,830	6,098	原 料 別 製 品	28,359	17,752
建設用・鉱山用機械	3,028	6,354	鉄鋼原料製品	7,844	1,868
荷役機械	3,079	3,388	非鉄金属	1,371	798
加熱用・冷却用機器	2,082	2,218	金属製品	529	552
繊維機械	8,806	6,944	織物用糸・繊維製品	5,616	4,825
ベアリング	764	1,020	ダイヤモンド加工品	11,958	8,614
電 気 機 器	21,549	31,279	貴石及び半貴石加工品	197	168
半導体等電子部品	2,852	7,079	その他非金属鉱物製品	450	508
(IC)	1,174	4,680	木製品等(除家具)	48	31
映像機器	934	1,157	一 般 機 械	3,046	4,213
(映像記録・再生機器)	553	1,058	原動機	365	504
(テレビ受像機)	381	99	電算機類(含周辺機器)	9	76
音響機器	5	9	電算機類の部分品	79	639
音響・映像機器の部分品	42	69	電 気 機 器	4,365	4,288
重電機器	1,956	2,921	半導体等電子部品	92	91
通信機	2,811	2,059	(IC)	82	69
電気計測機器	3,248	3,840	音響映像機器(含部品)	10	38
電気回路等の機器	3,859	4,551	(映像記録・再生機器)	-	2
電池	79	159	重電機器	1,033	1,601
輸 送 用 機 器	13,969	17,055	通信機	14	32
自動車	2,701	4,837	電気計測機器	76	149
(乗用車)	2,464	4,726	輸送用機器	941	1,173
(バス・トラック)	237	85	自動車	26	116
自動車の部分品	10,162	11,598	自動車の部分品	870	1,002
二輪自動車	5	96	航空機類	-	2
船舶	-	-	そ の 他	9,955	9,560
そ の 他	10,645	14,281	科学光学機器	71	104
科学光学機器	2,826	3,972	衣類・同付属品	6,600	6,093
写真用・映画用材料	2,932	2,609	家具	74	65
記録媒体(含記録済)	729	908	バッグ類	513	631

0は表示単位に満たないもの -はデータの無いもの

資料：(財)日本関税協会『外国貿易概況』『日本貿易月表』

9.

掲示板

<会員の皆様からのご意見よろしく>

『月刊インド』の内容をより充実していくために、会員皆様の貴重なご意見を是非お寄せください。特に、インドでの皆様の貴重な体験等インドについての投稿は大歓迎します。できうれば『月刊インド』にシリーズで掲載していきたいと考えております。

<お詫びと訂正>

6月号の記事で5ページの我妻さんの略歴で「1963年2月、同大学（東京大学）学芸学部」とあるのは「横浜国立大学 学芸学部」の誤りで、訂正します。

<次回の会報「月刊インド」の発送日>

2008年9月号の発送は、9月12日を予定しております。なお、2008年8月は休刊です。これからも、協会の皆様にインド関連情報を提供するお手伝いを充実していきます。インドに関係のあるチラシなどを会報に封入しませんか。詳しくは事務局までご照会ください。

～ 日印親善の輪を広げよう ～

法人会員・個人会員の入会をお待ちしております。

1903年大隈重信、澁澤栄一によって創設された（財）日印協会は、これまで日印の相互理解と両国の親善増進のために、日々地道な努力を続けてまいりました。当協会の活動資金は、もっぱら法人会員・個人会員の会費で賄われております。

ご希望により、当協会の活動に関する諸資料をお送りいたします。

日印協会の活動に賛同していただける多くの法人会員・個人会員のご入会をお待ちしております。

☆年会費:個人	6,000 円/口	☆入会金:個人	2,000 円
学生	3,000 円/口	学生	1,000 円
一般法人会員	100,000 円/口	法人	5,000 円
維持法人会員	150,000 円/口		(一般、維持法人会員共に)



財団法人 日印協会 〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町2-1-14 スズコービル2階

ホームページ: <http://www.japan-india.com/>

電話: 03-5640-7604 Fax: 03-5640-1576 E-mail: partner@japan-india.com

E-mail アドレスを変更しました。